

書評

小林聡幸 著

行為と幻覚

レジリアンスを拓く統合失調症

杉林 稔

やわらかい精神病理学である。装丁に工夫があり、子犬や子猫の写真が時折顔を出す。精神病理学はともすれば窮屈で偏狭なものになりがちだが、本書ではそれがのびやかな音楽のように響いている。

本書は4部構成になっている。

- 1 部 統合失調症のレジリアンス
- 2 部 経過からみた統合失調症
- 3 部 幻覚論とその展開
- 4 部 行為と記述

1 部では、統合失調症におけるレジリアンス(回復力)の様相がさまざまな角度から取り上げられる。一見病的な現象であっても、それが回復力のあらわれである場合がある。著者は統合失調症の躁うつ病化や妄想の二重見当識にレジリアンスの働きを見る。また、慢性統合失調症患者が透析を拒否して静かに死を迎えた事例や、怠薬傾向の強い統合失調症患者にデポ剤投与を導入したところ、精神症状は軽減したが自殺してしまった事例を挙げて、透析拒否や内服拒否そのものにレジリアンスとしての意義があることを指摘する。統合失調症における自我境界の希薄化についても、そこに一定の融通性があれば、レジリエントな界面として機能し、陽性症状を保ちながらも一定の安定状態を保つことを可能にするという。「日常への狂気の繰り込み」という言葉の使い方もおもしろい。病的現象をいたずらに敵視するのではなく、狂気そのものを味方につけながら戦略を立てる、「狂気内包性」(加藤敏)の医療がゆるやかに立ち上がる。

2 部以降は統合失調症の周辺的な症状に焦点が定められる。身体症状や知覚変容発作の意味

が改めて問われ、躁うつ病との関連性についての新たな視点が提示される。3 部では、総合的で要を得た幻覚論に続いて独語幻覚、加害的自生視覚表象、急性偽記憶精神病が取り上げられる。ともすれば見過ごされがちな諸現象が、著者の丹念な仕分けによってその独自の世界を開示し、潜在するレジリアンスの働きをも明るみに出す。4 部ではスマートな言語論が展開され、言語の持つ「発話内の力」が幻聴の「力」として働くという指摘がなされる。また予定体験(島崎敏樹)や「目」の症状に注目し、統合失調症にとっての自由とその行為の記述という問題に分け入ろうとする。

本書の最大の魅力は、開かれた議論がなされているという点であろう。そのために細心の注意が払われている。思弁の独走を戒めるように、常に臨床事例が起点に据えられている。従来あまり注目されてこなかった現象が取り上げられるが、幅広い視野で仔細に検討され、多くの思考が呼び寄せられる。順を追っていいいに説きほどく著者の筆は、まるでオーケストラ指揮者のタクトのように優雅である。難解で知られるラカンやヤンツァーリクも引用されるが、彼らに過度に傾斜することなく、精神病理学の中のワンオブゼムとして無理なく処遇されている。著者の存在は、難解さに自己中毒を起こしつつあった精神病理学を回復に導くレジリエントな存在として今後ますます注目されることとなるだろう。

(愛仁会高槻病院精神神経科)

●A5 260 頁 2011 定価 4,830 円(本体 4,600 円+税) 金原出版